



Medical Excellence JAPAN 理事長

近藤 達也

こんどう・たつや 東大医卒。脳神経外科医。国立国際医療センター病院長などを経て、08年医薬品医療機器総合機構（PMDA）理事長。「レギュラトリーサイエンス」（規制科学）を推進し、わが国の医療改革に貢献。19年から現職。78歳。

対コロナ、求められる「市民科学」

社会革新に広く参画意識を

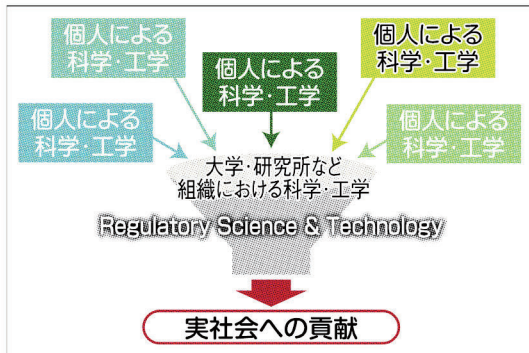
年が明け、心身ともに新しい門出と言いたいところではあるが、2020年から続くコロナ禍は勢いを増し、世界的にもこの「見えない敵との遭遇」を恐れる日常生活が広がっている。

「見えない敵」とは何者か。それを探る最も重要なアプローチは、まずあらゆる現象をなるべくエビデンスに基づき可視化、プロファイラ化することである。好き嫌いを乗り越えて科学的手法で、その全容・本態を明らかにすることが重要だ。このウイルスは既に患者の唾液や糞便に排出されていることが明確に認められている。

「見えない敵」の姿が明確になれば怖くはない。これに対する医学的な対応を明確に確立することにより、感染を合理的に防ぐことができるはずだ。ここでは既存の専門家に限らず他領域の研究者、多くの市民ももっと多く参加して正しい議論をして、この未知のウイルスに対してその本態を探る研究・工夫をすることが求められる。

学問や研究が大学や研究所の

講壇



「見えない敵」とは何者か。それを探る最も重要なアプローチは、まずあらゆる現象をなるべくエビデンスに基づき可視化、プロファイラ化することである。好き嫌いを乗り越えて科学的手法で、その全容・本態を明らかにすることが重要だ。このウイルスは既に患者の唾液や糞便に排出されていることが明確に認められている。興味や芸術などの世界を見渡してもさまざまな工夫や発見・発明が見られている。国民一人ひとりが、生活や業務、研究などの環境の中で絶えず改善を目指していることは、いずれの国家の運営においても最も重要な課題であり、常に進化し続ける目標でなければならぬ。これを目指した研究・工夫は計り知れない英知を生み、その成果は人々の健康と生活環境の改善をもたらす、さらには社会への大きな富をも生み出すことにつながる。加えて、事業の推進とそれに関わる人材の育成とその事業の運営、そして社会の規制環境の

整備は常に同じ方向性で成し遂げられねばならない。「産」も「学」も「官」もそれぞれ立場こそ異なるが、その目指す方向性を正しく認識して力を合わせていくことが望ましい。このような市民の求道的な活動をあらためて「Civil Science」、「Civil Technology」など付けてみたい。

どの分野においても、それぞれの立場での業務のあり方は、研究・教育が重要であり、とりわけ共通の土台であるレギュラトリー・サイエンスの手法の普遍的な活性化は、これからの社会の進化の源といって差し支えない。世界をリードできる活性化された社会を日本が目指していくためには、広く人材の交流の分野でも、国民目線での産学官の連携がますます重要になってきている。

安倍晋三前政権が掲げた「人づくり革命」の具体策を検討する「人生100年時代構想会議」の中間報告がなされ、「リカレント（学び直し）教育」の実現に向けた産学官の連携が唱えられ、年齢や既成の概念にとられない自由なキャリア選択が可能となる社会にしていく必要性が指摘されている。加えて、今後はそれらのガバナンスを含めて革新的な社会体制が再構築されていくことが述べられている。その成果には私は強い期待を抱いている。（次回は早稲田大学政治経済学術院副学術院長の深川由起子氏です）